大好き！幾春別川

DAISUKI! IKUSYUNBETSU RIVER

(1)2004(平成16年)3月28日(日曜日)

VOL.05

●無料版 ●年間発行 ●新聞・冊子版 ●配布エリア：岩見沢市・三笠市・美唄市・砂川

発行元：幾春別川ニュース編集委員会

編集委員長　嵯峨　義輝

〒068-0007

岩見沢市7条9丁目　石狩川開発建設部教育室(河川事務所内編集委員会事務局)

TEL：0126-23-9555　FAX：0126-25-1697

特集

北村に森をつくろう。

真冬の植林

「川のそばに、子どもたちが自然環境について楽しみながら学べる森をつくりたい！」との熱き思いを持つ人々によって、昨年から北村で行われている雪中植林。

今年は2月14日土曜日、積雪がとけかかるほどの暖かい天気のなか、北村の中央地区旧美唄川河川敷地で実施されました。参加者は旭川や札幌などの遠方からも駆けつけ、合計で200人。カミネッコン（次ページ参照）を使って、500本の木が植えられました。

1月の初めから実行委員会の北村と、NPO法人「山のない北村の輝き」が中心となり、準備を進めてきました。仕事などの忙しい合い間を縫っての作業でしたが、「みんなで協力しながら進めてきたので楽しかったですよ」とスタッフの一人。

植林のあとにはスノーモービルとソリ滑りのお楽しみも用意されており、参加者たちは思い思いに雪遊びを満喫。昼食にはスタッフ手づくりのおにぎりと豚汁を食べて、冷えた体を温めました。

木が大きくなるまでには長い歳月がかかりますが、昨年の冬に植林した木々は少しずつ大きくなってきており、「子どもたちが大人になるころには美しい森が広がっているでしょう」と、参加者たちは木々の成長を心から楽しみにしています。

こぼれ話

知っていますか？地名の由来

「北村」

北海道の地名の多くは、「アイヌ語」「開拓功労者」「開拓者等の出身地」などに分けられますが、北村は、開拓功労者名由来型の村名の１つです。

明治27（1894）年、山梨県若草町出身の北村雄治氏（現在の南アルプス市若草地区）が、狐森（きつねもり）一帯の土地を選定し、北村農場を開墾して村の歩みが始まりました。そして明治33（1900）年、岩見沢村より分村独立するときに、その北村雄治氏の姓にちなんで「北村」と命名されたのです。

ところで、「北村雄治の姓」にちなんでいますが、「北村・村」ではなく「北・村」ですので、お間違いなく

（出典：北村史など）

北村発祥の地、「北村牧場」（現在）

雪中植林の不思議

真冬に木を植えるワケは…

「冬でも立派な木がちゃんと育つんですよ」と、雪中植林の提唱者、東（ひがし）三郎さん。

東さんによると、降り積もった雪が布団代わりとなり、土の中は温かさが保たれています。雪の下の土は凍らず、植物のタネはじっと力をためています。そして温かい春になると、タネや木の枝は元気よく芽を出します。

こういう理由から、春に植林を行うよりも秋や冬に行うほうが植物のためには良いそうです。

木の根は下ではなく横に張っていくものなので、大きな木になるほど移植するときに苗木の根を傷めてしまいがち。専門家でなければ難しい作業です。

そこで、誰もが簡単に植林できるようにと東さんが考案したのが、「カミネッコン」（下のイラスト参照）です。"紙の壁で根をコンパクトに守る"という意味が込められています。

作ったあとは穴を掘らずに、地面に置くだけ。「資源を無駄にせず、そして地球に負担をかけないように」と、考えられています。

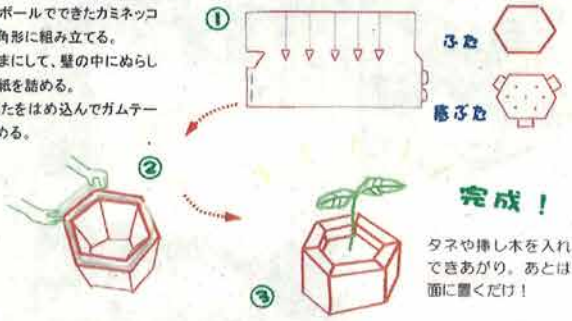
カミネッコンに植えたタネやヤナギなどの挿し木は紙の壁で守られており、他の植物の侵入や土の乾燥を防ぎます。確実に、植林を成功させる方法ということです。

もちろん、木が生長したあとのことも考えています。紙製なので時間が経つと風化して、いずれはカミネッコンも土に還るのです。

この方法だと暖かい室内でカミネッコンを作れるので、たくさんの木を育てることができるのです。

カミネッコンのポットづくり

①ダンボールでできたカミネッコンを六角形に組み立てる。
②逆さまにして、壁の中にぬらした新聞紙を詰める。
③底ぶたをはめ込んでガムテープで止める。

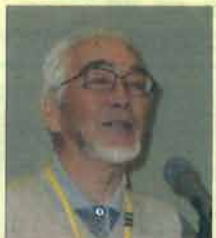


完成！

タネや挿し木を入れてできあがり。あとは地面に置くだけ！

講師紹介

東　三郎さん
（ひがし　さぶろう）



1926（大正15）年、鹿児島県生まれ。森林空間研究所主宰、農学博士、北海道大学名誉教授。専門は砂防学。荒廃地の植生復元に取り組み、樺裳岬などの緑化事業を成功させた。

豊かな北の森を市民自らの手でつくっていこうと呼びかけ、1999（平成11）年、札幌市豊渓で『北の国の森づくりサークル』を設立し、代表を務める。

今は太陽光、風力、水力、地熱などがクリーンなエネルギーとして価値が認められていますが、これからの時代は『森力』も大事だと考えています。"森の力"がないと、炭酸ガスを吸収してくれるものが他にはないのです。森は、燃料や水源林、土壌保全としての役割を持ち、そして、わたしたちに酸素を供給してくれます。高齢者も子どもも、みんなで楽しく交流しながら、豊かな森をつくりあげていくことが大切です。

次に、地域性を尊重することも大切です。山のないところに「山」をつくるのではなく、山のないところに「森」をつくる。北村の人にはどこかの真似をするのではなく、北村のやり方を考えてほしい。自分たちで色々と試しながら、北村独自の方法を見つけてほしいですね。（講演会より）

スノーモービルを愛好者たちが持ち寄って、植林のあとに体験試乗を河川敷地で行いました。

参加者たちは広々とした雪原の疾走を満喫。川の表面が凍った旧美唄川と、新しくできた「たっぷ大橋」の姿も確認できました。

また、3メートルほどに積みあげた雪山に坂道がつくられ、大人たちが見守るなか子どもたちは、元気良くソリ滑りを楽しんでいました。

参加者のこえ

左から、野田和希くん（5歳）、瑞絵ちゃん、（小2）、鈴佳ちゃん（3歳）

左から、西方昇平くん（小4）
西方雄佑くん（中2）

三浦卓馬くん（小5）
三浦瞳ちゃん（小3）

子どもたちは、スノーモービルやソリ滑りを大いに楽しんでいました。全員から「来年もまた参加します！」と元気な声が返ってきました。

大人たちからは「大きくなった木を早く見たい」「植林は自然を守る上でとても大切なことなので、これからも続けていきたい」という、自然環境保護を意識した声が多く聞かれました。

昼食で出された豚汁とおにぎりは、ブレンド米『みずほ舞』を販売する北村のみずほグループの皆さんが、朝早くから調理してくれました。

みずほ舞は適度な粘り気があるお米で、「少し冷めたころがおいしいですよ」（藤巻さん）とのこと。程よく時間が経つことで、お米の旨みが引き出されるようです。

●金印10kg　4,500円
●銀印10kg　4,000円
※5kgは上記の各半値
ご注文は、
電話（0126）55・3232まで。
※北村では、北村温泉ホテル内のレストランで食べることができます。

おいしさの理由は、きらら397に「彩」という品種のお米をブレンドしているから。そして、配合を変えて何度も"試し炊き"をしては試食して、おいしくなるように味の研究をしているのです。

このお米は、札幌のホテルや飲食店などでも食べられており、多くのファンがいます。ぜひ一度味わってみてください。

左から、みずほグループの浜本照美さん、藤巻季太郎さん、只野かつよさん

流域の名所・名産品紹介

三笠市・邦梅園「梅」

患者さんへの思いから始まった梅園

毎年5月中旬には約1万本の梅が10㌶の土地に一斉に咲き誇り、ほのかに甘い香りが広がる邦梅園。

梅の種類は「豊後梅」と「紅梅」の2種類で、紅、桃、白の愛らしい梅の花々が、緑が萌え始める自然豊かな三笠に彩りを添えます。

邦梅園は今から18年前の昭和61年、三笠市内にある本間病院の院長先生が「患者さんの気持ちを少しでもいやすことができたら」と考えて、炭鉱住宅跡に植えたのが始まりです。

開園した当初は木の管理はもとより、土の管理が大変だったようです。木の皮を購入運搬して土壌改良を行いました。そうすることで現在の美しい花を咲かせることが出来たのです。

まちづくりに貢献した梅のチカラ

花が咲いたあとには"実"が成ります。「せっかくだから日本で一番美味しい梅干しを作ろう」と、平成2年に工場を建て梅干し作りが始まりました。

当初は試行錯誤の連続でしたが、今では東京にも大勢のファンがいるほどのおいしい梅干しに成長しました。「本場の紀州にも負けません」と、三笠の人々は胸を張ります。梅干しは市内の各商店で購入することができます。

また、梅の人気にあやかって市内の「かいや菓子舗」（海谷一美さん経営・電話0126 7・2・3042）は、『地元の食材を活用したお菓子を』と、ねり梅を挟んだどら焼き（1個100円）をつくりました。

毎年約1万人の人出があるイベント（左記参照）は、第3回目から商工会を中心に連営されています。また、市役所も協力してイベントの雰囲気を盛り上げています。

民間が始めた取り組みが、まち全体に賑わいを呼ぶ名所・名産品に育ちました。

グルメ情報

北邦の梅

7月末からお盆にかけて梅の実を収穫し、ビニールハウスのなかで2、3回引っくり返してはまんべんなく天日に当てて、表面を乾かします。そのあと特製のタレに漬け込んで、じっくりと熟成されるのを待ちます。やわらかな皮の中には自然の旨みがたっぷりと詰まっています！

- ●130g　300円　●甘口350g　1,000円
- ●900g　2,500円　●甘口900g　2,700円

三笠梅ワイン

完熟の梅干しだけを使っているワインは食前酒にピッタリ。適度な酸味と甘みが上品な味わいです。

- ●720ml　1,170円

商品についてのご注文・お問い合わせは
（有）邦梅園
電話（01267）7・6016まで。

「うめぼし種飛ばし大会」の平成13年と平成15年の優勝者、猿田正人さん。11㍍40㌢の最高記録を持つ。今年は3度目の優勝となるか？

5/16（日）

第18回　みかさ梅まつり

歌謡ショーや輪投げ大会などの楽しいプログラムが盛りだくさんの梅まつり。なかでも「うめぼし種飛ばし大会」は、男女各30名の定員があっという間に締め切りになるというほど盛況。梅干しの種の飛距離を競争するという単純なゲームですが、助走は駄目、種が2.7mの幅からはみ出しては失格などのルールがあります。また、よく飛ぶように口の中に唾液を溜め込んでおくとか、小さい種のほうがよく飛ぶなど、"飛ばし方のコツ"もいろいろとあるようです。あなたもチャレンジしてみませんか！入賞者への景品はもちろん、邦梅園の梅製品。

●お問合わせは三笠市商工会
電話（01267）2・2249　まで。

Dr.リバーの何でも調査室

魚道の完成前（右上）と完成後

「幾春別川ニュース」の創刊号では、川向頭首工の魚道工事のことが書いてありましたが「魚道（ぎょどう）」とは何ですか？

川の中には、頭首工などの人工的に作られた段差（堰）がありますが、そこからは魚が自由に上流や下流に行ったりすることができません。しかし、この段差を階段状にゆるやかにしたり、段差を迂回できるような水路を造れば魚が上りやすくなります。このような施設を「魚道」と言います。最近は魚の習性をうまく利用し、より魚が上りやすい魚道が研究され、各地で工事が実施されています。

春　沼は生きものたちの誕生の場

連載　田園暮らしを楽しもう②

「雪と土の北の生活館」館長（北村豊里）秋田谷　英次さん

秋田谷さんが北村に、研究所『雪と土の北の生活館』を建ててから、今年で6年目になりました。ご自分でベランダから見える沼（写真上）を造って4年。沼にはいろいろな命が芽生えたそうです。

「まず、植物ではコウホネ（写真左）。最初は全く何もなかったのに、いつのまにか増えていました。清楚な姿のビッシリ（写真右）も咲きました。ヒシも少なかったのに、大事にしていたら夏にはあっという間に沼一面にびっしり！駆除するのが大変でしたよ」。

どうやら、鳥たちがいろいろな草花の種子を運んで来るようです。

「魚はウグイやフナ、ワカサギ、ドジョウ、鯉が紫色に輝くタナゴも。鳥は、好物のドジョウを狙ってアオサギが毎年飛来します。カルガモの親子も10羽ほど連なって、島の周りをかわいらしく泳いでいます」と、沼はまさに動植物たちの楽園のよう。

「ホタルも蘇（よみが）えらせたいけど、特に目的をつくらずに自然に任せて、様々な生きものが育つのを観察するのが楽しみです。何が起きるか、わからないのが面白いのです」。秋田谷さんも気がつかないうちに、沼には素晴らしい生態系ができあがっていました。

沼のなかには秋田谷さん"手づくり"の島もあり、生きものたちの休息場所になっているようです

秋田谷　英次さん
（あきたや　えいじ）
元北海道大学低温科学研究所所長、現北星学園大学教授。日本の雪崩学研究の第1人者。

また会う日まで・・・・

サケの稚魚　飼育ストーリー

放流する直前のサケの稚魚

大事そうに、コップに入っているサケの稚魚を見つめる子どもたち

三笠と岩見沢の取り組みから

今年も稚魚たちの旅立ちの季節を迎えました。サケの稚魚を放流する行事はいつも新聞などで華々しく報告されますが、その裏には世話をする人たちの大変な苦労があります。今回はそんなエピソードを少しだけご紹介します。

三笠小学校の森井智江教諭先生はこう語ります。「放流する日が近づいたある日、目と頭だけ大きくなった稚魚がたくさん死んでいました。驚いてサケ・マスふ化場に電話すると、『餌死したのでしょう。エサが大きすぎて飲み込めなかったのでは』と言われたのです」。体の小さな稚魚には、エサを粉状にすりつぶしてやらなければならなかったようです。エサをたくさんやればいいというわけではなかったのです。大きいということは川の冷たい水が当たる表面積も大きくなるので、体温調節が上手にできなくなります。このため、放流するときの大きさは4㎝～5㎝が適切なようです。森井先生は、「エサの管理が大変です。けれども、少しずつサケのことがわかってきて、子どもたちにも色々なことを教えることができます。とても貴重な経験をさせてもらっています」と、苦労と喜びについて語ります。

三笠の稚魚放流は4月14日、市内6つの小学校と中央中学校付近の安全な川辺で、合計2,000匹ほどを予定しています。「ぜひ参加してみたい」という場合は、三笠市教育委員会（01267・2・2197）までお問い合わせください。

岩見沢の市民団体、「幾春別川をよくする市民の会」の会員は、昨年12月、オレンジ色に輝く新しいサケの命を手にしたとき、発眼卵（ほつがん）が孵化するあのドラマチックな瞬間を思い起こし、心はすむ思いをしていました。ところが「大切に育てようと思った矢先、水槽を見に行ってびっくり。水が白く濁っていたのです。「こんなに一生懸命飼育しているのに何が起きたの！」。いろいろ調べたところ、ろ過器の吸水口に、卵の殻が残っていたことが原因でした。慣れから来る油断だったようです。「失敗も多く、何年飼育してもこれで完璧ということはありませんが、無事に大きくなった『子供たち』を見送るのは感無量です」と語ります。

岩見沢の稚魚放流数は、20,300匹を予定しています。日程については下記の年間行事予定表をご覧ください。詳しいお問合せ先は岩見沢建設部建設管理課庶務係（0126・23・4111）まで。

サケの稚魚たち、早く大きくなってふるさとの川に帰っておいで！

水辺の風景　写真募集

あなたの好きな水辺の風景を写してみませんか。

応募内容

- ・プリント、デジタルデータ、ポジフィルムなど、形態は自由。
- ・あなたの「想い」など、お送りいただく写真の風景についてのコメントを原稿用紙などに100文字以内にまとめて、写真と一緒にお送りください。
- ・順次「大好き！幾春別川」に掲載させていただきます。

※1人何点でも可。
※写真の返却は致しません。
※応募は随時受付
送付先：財団法人北海道開発協会　事業調査部
住　所：札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

連載・川の記憶「幾春別川と炭鉱」その4

炭鉱閉山・消えゆく鉄路

戦後まもなくして黄金時代を迎えたかに見えた石炭産業でしたが、やがて2つの問題に直面します。

1つは、労働組合の組織化の広がりとそれに伴う労働争議の頻発（ひんぱつ）でした。もう1つは、石炭の供給過剰と、昭和27年の重油自由化を告げるかけとした石油・重油へのエネルギー転換でした。30年代から40年代になると、国のエネルギー政策が石油へと移行し石炭も安価な輸入炭に押されて、各地のヤマは規模縮小や閉山へと追い込まれていくこととなったのです。

幾春別川流域でも炭鉱統合などの合理化が試みられましたが、時代の流れには抵抗できず、同46年10月に奔別炭鉱が閉山、残る幌内鉱も平成元年についに閉山となりました。

ヤマの縮小は三笠の街にも打撃を与えます。産業の一つの柱を失って人口の減少が続いたほか、同47年に国鉄幌内線の三笠～幌内間の旅客運輸が廃止されたのを手始めに鉄道の縮小も進み、同62年にはついに幌内線が廃止となりました。

北海道の鉄道の歴史を背負ってきた幌内線は、国鉄がJR北海道に移行されて初めての廃止線となったのです。

一方、こうした時代の流れの中で、幾春別川は徐々に澄んだ水を取り戻してきました。川がきれいになると、少しずつ川の良さや川の果たす役割の大きさなども見直されはじめてきました。

かつて、炭鉱の発展を支えた幾春別川は今、流域の人々の暮らしに潤いをもたらす貴重な水辺空間として多様な役割を果たし続けているのです。

石炭積出し（昭和42年・幌内）
歴史写真集「みかさ」より

お便りお待ちしております！

本紙は、楽しい誌面をつくるために読者みなさまからのご意見やご感想をお聞きしております。また、「○○についてぜひ取り上げてほしい！」という話題もお待ちしております。どしどしお寄せください。

【連絡先】
財団法人北海道開発協会　事業調査部
住所：札幌市北区北11条西2丁目
セントラル札幌北ビル
※ご質問の内容は郵送か、FAX（011・709・5227）でお願い致します。

年間行事予定

●第2回全道水辺の楽校サミット
- ・開催日：3月28日
- ・開催場所：三笠市立幌内小学校
- ・主催：三笠の湖・川・緑を愛する会

●サケの稚魚放流壮行会
- ・開催日：4月14日
- ・開催場所：岩見沢市＜西大橋下流左岸＞
- ・主催：幾春別川をよくする市民の会

●幾春別川カップin三笠～カヌー競技
- ・開催日：6月19・20日
- ・開催場所：三笠市西桂沢
- ・主催：三笠カヌークラブ

●フラワーライン
- ・開催予定日：6月下旬
- ・開催予定場所：＜花壇の植栽＞狩野橋左岸下流部分、＜草取り＞狩野橋左岸下流部分
- ・主催：幾春別川をよくする市民の会

●河川愛護月間・空き缶拾い
- ・開催予定日：7月上旬
- ・開催予定場所：旧美唄川北栄橋下流左岸
- ・主催：NPO法人山のない北村の輝き・北村ライオンズクラブ

●石狩川下覧櫂～川下り
- ・開催予定日：7月中旬
- ・開催予定場所：石狩川・深川市～月形町
- ・主催：石狩川下覧櫂実行委員会